

# 「金田団宮」の前夜

—広西桂平県紫荆山区の移住と拝上帝会—

菊 池 秀 明

## は じ め に

広西桂平県北部にある金田村、太平天国の蜂起地点としてすっかり有名になったこの村には、現在ささやかな記念館が建てられ、時折り観光客が訪れる。人々は皆「宮盤」と呼ばれる、当時練兵場となった丘の上から目の前に広がるのどかな農村風景を眺め、「なぜこんな場所で秘密の武装蜂起を準備出来たのだろう」と首をかしげる。だがもしかしたら背後にそびえる山々を振り返るなら、その謎も自然に解けてゆくことだろう。紫荆山——この足を踏み入れる人とて少ない山郷こそは拝上帝会を育んだ搖籃である。

1987年からの中国留学中、私は2度この地を訪ね、16日間にわたる調査を行なう機会に恵まれた。以下ではその成果をもとに拝上帝会を生み、またその活動を規定した様々な社会背景を出来る限り具体的に描き出してみたい。

1

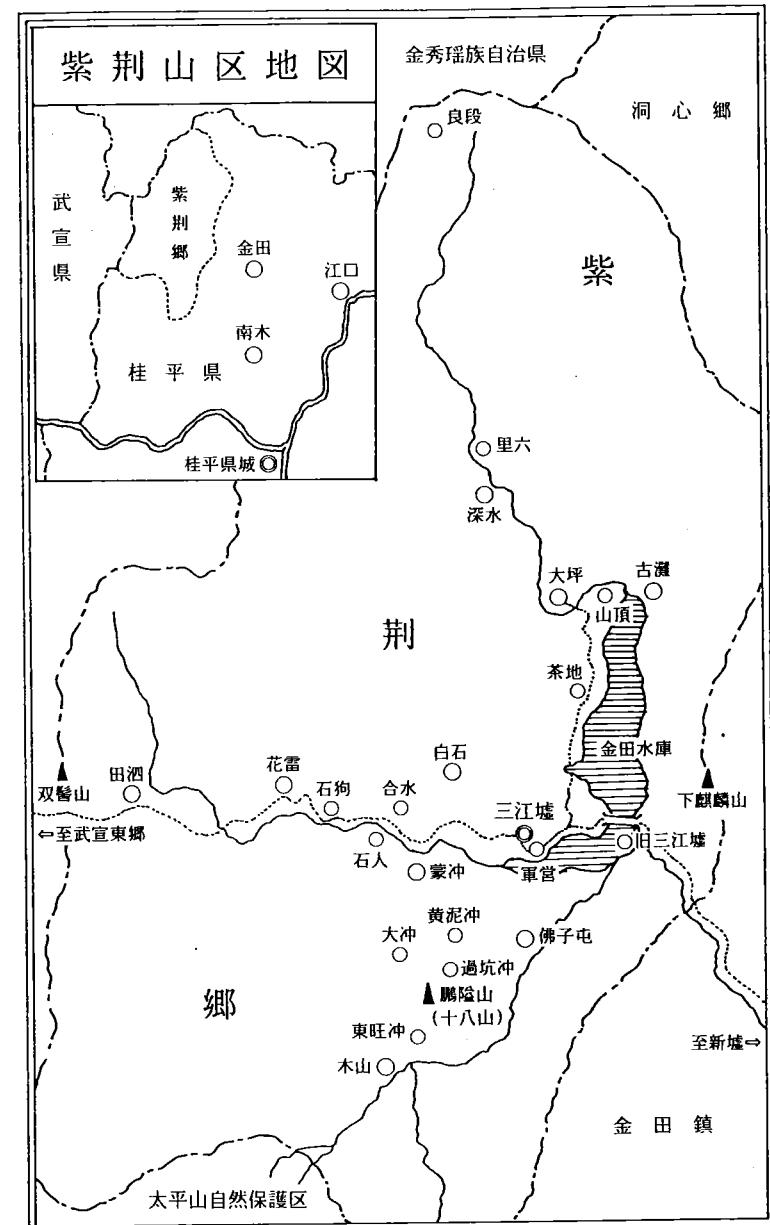
新墟（金田鎮）から並木道を西へ5キロ、王謨、古林社など太平天国史上名高い村々を通り過ぎると、バスは次第に峠にさしかかる。紫荆山の入口風門坳は、かつて清軍との間に争奪戦が繰り広げられた要所であり、現在は金田ダムとそれに続く湖が、紫荆の表玄関を彩る光景となっ

ている。

紫荆郷は総面積 249 平方キロ、洪水頂（1313 メートル）を筆頭に双髻山、上・下麒麟などの峻嶺が周囲に連なり、その北端は大瑤山（金秀瑤族自治県）へと続いている。山内も起伏が多く、平地は約 2 割。建国當時、郷内の水田面積は 7 千畝に満たず、6 千人強（太平天国当時は 4 千を超えたなかっただろうという）の人々は「多く種田・耕山を主とし、焼炭・種藍を副業にし」て暮していた。その後 40 年で多くの耕地が開墾されたものの、一方 58 年のダム建設により数千畝の田畠が湖中に没し、林業など「山」への依存度は相変らず高い。現在ここには壮（チワン）・瑤（ヤオ）族を含めた 2 万 4 百余の住民が、杉・筍・木耳・シイタケなどの特産を頼りに生活している。

これまで紫荆に入るには、ダムの脇から渡し舟に乗らなければならなかったが、89 年 1 月に紫荆大橋が完成し、交通の便はずっとよくなつた。それに伴い郷内の経済も活気を帯びていると書きたいところだが、現実はそうではない。83 年、香辛料に用いる沙姜の栽培で紫荆は数千の労働者が集まる程の賑いを見せたが、不安定な需要、市場動向を踏まえぬ盲目的生産、沙姜の品質悪化などの原因が重なり、今では殆んど廃れてしまった。加えて山内は米・油などの生活必需品を外地からの搬入に頼るため、どうしても支出が増え、人々の生活も楽ではない。現在は逆に百人ほどが広州に出て「打工」<sup>でかけて</sup>していると聞いた<sup>1)</sup>。

いま一度、山内の風景を見渡してみよう。かつての紫荆の経済的中心三江墟は現在ダムの底となり、軍營村（象軍村）の丘の傍らに移転している。この村の歴史は古い。明代の文献に「紫荆營、軍營」<sup>2)</sup>の記載が見え、大藤峽ヤオ族反乱に対処するための砦が置かれていたことがわかる。いまも村内には当時の墳墓のほか、太平軍も使用した堡壘の跡が残っており、丘の上に立つと山内が一望出来、ここが戦略上の重要地点となった理由がよくわかる。軍營から花雷水沿いに 5 キロ西が蒙冲、このあたりは比較的土地が開け、棚田も多い。のちに拜上帝会と敵対する紫荆随一の有力者王作新が居を構えた石人村はその西端にあり、彼の族人が住む石狗を抜け、花雷村を越えると武宣東郷に通じる。一方洪秀全らが活動の拠点とした大冲は蒙冲の南に位置し、地図の上では近いが、実際は山あいの坂道を小 1 時間歩く。拜上帝会の創設者馮雲山が教えた



曾家（曾開文一族）の私塾跡を中心に 10 畝程の田があるほかは、周囲に山林が迫り、景観は大いに異なる。雲山が最初に紫荆山に入った時、住んだという過坑冲・黃泥冲なども同様で、黃泥冲の場合解放前 20 戸弱、40 人程の人口（貧しく結婚出来ない単身漢が多かったため）に対して耕地は十数畝、土地を持たぬ者は山肌に木<sup>ヒトツノモ</sup>薯<sup>キヤウサバ</sup>を植え、食糧にあてていた<sup>3)</sup>。東王楊秀清の故郷鵬隘山に至っては、三江墟から 3 時間の登山である。彼が住んだ東旺冲は木山（十八山）の谷底にあたり、途中細く険しい山道を丸太や薪木を背負って降りてくる人々の姿を幾度となく見かけた。拜上帝会の参加者は多く「種山の民」であったといい、秀清や蕭朝貴（西王）も「焼炭を以て生とした」<sup>4)</sup>と言われるが、その説が改めてうなづかれる思いであった。現在この一帯は瑤族（盤瑤・過山ヤオの一種）の居住区となっている。

次に東に目を向けると、軍營から 6 キロ程のところに茶地村がある。蜂起後、武宣・象州を転戦してきた太平軍はここに司令部を設け、清軍と対峙した。洪秀全が出入りしたという趙家の大堂は今も一部が残っている。さらにここから北に向かうと大坪、往年の富豪溫宏開（温四公）はこの地の人である。彼ら温氏の族譜は道光年間の紫荆飢民暴動を記したことで知られ、また太平軍に参加した先祖についても明確な記載があったというのだが、54 年の文史調査団の調査時に失われ、今となっては尋ねる術もない。ところでこの温家、廣東惠州（一説に嘉応州）から移住してきた客家である<sup>5)</sup>。紫荆に客家は多い。王・曾そして大坪山頂村を中心とする劉家など、山内の「大姓」は多く客家であり、現在紫荆の全人口の 7 割近くが客家語（現地用語では咾咕<sup>ルガ</sup>）を話しているという。無論多民族雜居のこの地区では瑤族を初め、壯語を話す人口も 3 千は下らず、また金田方面から移ってきた「講白話」（平話）の廣東人もいるのだが、ひとり客家語だけは「人人都会講（だれもが話せる）」、事実上の共通語となっている<sup>6)</sup>。太平天国、とりわけその初期の活動において、客家が重要な役割を果した点については、これまで幾度となく指摘されてきた。花県出身の洪・馮をはじめ、楊秀清・石達開といった中心人物は皆客家であり、馮雲山が紫荆に入り拜上帝会を組織したこと自体、客家の「同郷」関係を頼ってのことであった。初期太平軍の参加者が多く客家で占められていたことも否定出来ない事実であり、その影響は太平天国の

文化など多方面にわたっている<sup>7)</sup>。もちろんそれは、太平天国が客家の運動であったことを意味しない。狭い紫荆山内ひとつ取ってみても、チワン・ヤオ族などの参加が報告されており、逆に挙上帝会と対立した王作新一族もやはり客家であった。人々を挙上帝会に結集させた要因は何であったのか——この問いに答えるには、先ず紫荆の移住と開拓の歴史から、深く掘り下げてみる必要がある。

## 2

明代万暦年間編纂の『殿粵要纂』をひもとくと、桂平県の北岸はほぼ一面「猺」の表記で埋められている。当時の紫荆は「桂平大宣鄉・崇姜里をもって前庭とし、象州東鄉・武宣北鄉を後戸とす」る大藤峠の範囲に属し、「羅滌・三洞・紫荆等三十六巢，岩洞は百を以て計」えたとあるように、この地に初めて住み着いたのはヤオ族であった。大沖・黃泥冲などの村々も元来は「猺寨」であったようだ<sup>8)</sup>。現在木山をはじめ良段・横冲に住む盤瑤が、その後裔であるかどうかははっきりしない。彼ら自身は湖南千家洞から広東樂昌県、金田・江口の上・下瑤村を経、350年程前に紫荆山に入ったという言い伝えを持っている。むしろ紫荆の場合特徴的なことは、軍營村の藍・侯、茶地の趙・盤など、壮語を話す人々の間にヤオ族の「著姓」が目立つ点である<sup>9)</sup>。ただし彼らもまたチワン、ないしチワン化した漢族というアイデンティティーを持っており、彼らがもとヤオ族であったことを示す積極的根拠は見当たらない。

明代は広西において民族間の矛盾が最も激化した時代であった。大藤峠もまた桂平羅滌洞人侯大苟らが率いる反乱軍の拠点となり、その抵抗は明代を通じて続いた。これに対し明朝は幾度となく「征討」の軍を派遣、「(成化元年・1465)諸道は並び發した。賊は大いに懼れ、婦女を置き、桂州・横石等塘に積聚り、險堅に拠って壁守した。悉力出悍、鏑鎗を挟み、薬簇の下ること雨の注ぐがごとくであった。(韓)雍は督戰すること益々急、官軍は団牌・扒山虎等の器仗を用い、魚貫って進み、皆殊死して戦い、呼び声は山谷を裂いた。賊は氣を奪われ、山南・石門・大信・道袍・屋廈・紫荆……沙田・古營・牛腸・大岵等の寨を歴破、……遂に

侯大狗ならびにその眷属七百八十余人を生擒り、斬首すること三千二百七級、獲えた賊属婦子は二千七百一十八人余、戦・溺死した者は数え切れなかった」と、大規模な殺戮が繰り返された。当時の悽惨な記憶は、この地で敗死した黄戎都督への信仰となって残り、毎年八月十五（中秋）、茅で作った船・馬に紙の彩色旗を挿し、これを香と共に焼く習慣が伝えられている<sup>10)</sup>。

こうした歴史的背景のために、紫荆山の開拓の時期は比較的遅い。乾隆『桂平縣資治圖志』には「大藤峠賊が煽乱してより、人迹罕かに通ず。猺賊が据って巢とした。平定の餘におよび、狼人を招いて隘口を守らせた。国朝康熙年間、匪類の出入があり、譚總兵……の征剿を経て始めて平げた。隨いで山口に紫荆汎を設け、官兵がこれを守った。人民を招復して隘内に進め、洞田を開辟。漸く村落をなし、賦税を受け、夫役に当り、大宣里（金田・江口）の民と異ならなくなった」<sup>11)</sup>とあり、本格的な開拓が始まったのは、明末清初の動乱が終息した康熙年間のことである。この初期入植者の事例として、軍營村の藍・陳2姓を見てみよう。彼らは共に紫荆で14、5代の歴史を持ち、山内に多くの族人を擁する大姓（陳姓1千人強、藍姓4百）で、壮語を話している。原籍はどちらも「広東勒竹坑」、初め藍氏の開祖善居が妻と2人で紫荆に移住したが、息子がなく（一説に善居が若死し）、同郷の陳某を招いて婿にとり、生まれた子の一人に陳姓を継がせた。これが軍營陳氏の始まりで、以後両家は「不同姓兄弟」を称し、通婚を避けた<sup>12)</sup>。一般に紫荆では歴史の古い村ほど壮語を話す雜姓村落が多い。軍營の場合藍・陳2姓のほか以前は尚・李2姓が住んだが、やはり「講壮話」で、遅れてこの地に定着した侯姓（原籍不明、山内の古灘・深水から花雷を経て軍營に移った。もとヤオ族?）も「入水從鬱」、彼らについて壮語を話すようになった。花雷・茶地・沙田（すでに水没）なども同様で、花雷の場合壮・漢合させて9姓が雜居していた。この点はのちに遅れて移住してくる客家が、多くの場合单姓村を形成したのに比べ非常に对照的である。その原因の一つは藍・陳2姓が「不同姓兄弟」となった経緯にも見られる非漢族の婚姻・家族制をめぐる習慣の違いにあるが、同時に複姓から单姓へと向かう移住民社会の村落形成のあり方が、典型的に示されているためと考えられよう<sup>13)</sup>。

ところで以上の事実は我々に、紫荆の初期開拓の過程でチワン族が果

した役割の大きさを教えてくれている。当時ふもとの「宣一・二里は村の獐なきはなく、十羅九古の名はみな獐村」<sup>14)</sup>と言わされたから、初期移民の少なからざる部分が彼らによって占められたのも、ある意味で当然の帰結であった。現在紫荆の地名の中には那生（高田の意）・那良・過斗など壮語の命名によるものが散見する。また後に詳述する花雷雷氏のように、「山主」として大きな勢力を振った人々もいた。だが全体として見た場合、彼らの多くはしばしば漢族地主の「招佃」を受けた佃農チワンとしての性格が強い。例えば軍営藍氏の場合、善居が入植後「山林を開墾、一人当たり数畝の土地を耕したが、のち貧困から売ってしまい、他人の田を小作するようになった」とあり、陳氏も民国期、国書・国泰が「万富翁」を称したもの、元来は「はなはだ困難」であったという<sup>15)</sup>。ダム建設により茶地に移った那郷村の盤姓もその一例で、耕地の「大部分は租田で、自耕地は2、3畝に過ぎず、人家に替って長・短工した」と言われる。また彼らが紫荆に移住した理由について見ると、盤氏の場合、祖籍地は梧州岑溪県（明代ヤオ族反乱の根拠地の一つ）、初め金田新墟郊外の三家村に住んだが、一族の人口が思うように増えず、同村の黃・凌2姓の「欺負」を受けたため、風水上の理由もあって那郷に移った<sup>16)</sup>。明末清初以来、金田では漢族の官僚・商業移民が地方権力の庇護のもと、先にこの地に入ったチワン族を押えて急速に発展、「客籍これを凌ぐも、あえて抗する者なし」と言われる状況を生み出しつつあり、有形無形の圧力を受けた彼らは山すそから山内へ後退せざるを得なかった。紫荆の初期開拓が多くチワン族によって担われた最大の原因もここにある。さらにこの過程で「粵東・福建・江西から遷って来た者が村中に雜處」した漢族との頻繁な接触は彼らを次第に漢化させ、「風俗はすでに質より文に赴いたが、家常言語はなお存する」と、言葉や七月十四（鬼節）など節句の僅かな差異を除いて、民族的アイデンティティーも希薄になっていた<sup>17)</sup>。婚姻も「壯・漢を分けな」くなり、那郷盤氏の場合劉・李・吳姓との通婚例が多かったが、これらはいずれも「講白話」の漢族であったという<sup>18)</sup>。

それゆえ、当時の紫荆で経済的実力を握ったのは、やはり主として漢族であった。金田ではのちに「安良約」の創始者黃体正を生んだ古程黃氏の始祖士魁が「貿易して富を致し」、父連舉の墓を紫荆深水に移して

「荆樵」と呼ばれる祀田を置き、これを族人に耕作させたのを初め<sup>19)</sup>、王謨劉家（原籍廣東南海）<sup>20)</sup>・鶴母氷黄家（廣東高明）などが一部紫荆に移住していった。彼らは往々にして「講社話」へ同化しながらも、鶴母氷黄氏の紫荆開祖廷欽が一説に10万斤租（約5百畝）の耕地を所有するなど、かなりの勢力を持った<sup>21)</sup>。茶地村の趙姓もこうした例の一つだったようで、彼らはもと廣東南海人、10代前に先ず蒙冲に至り、ここで数万斤租の土地を手に入れた。のちに趙家は石人王家との争いに敗れ、茶地に移るが、再起して「紫荆四富」のひとりとなり、監生振元を生んだ<sup>22)</sup>。では彼らはどのように、これらの土地を経営したのだろうか。黃体正『帶江園雜著草』には次のような一節がある。

吾が族公祖の遺は、ただ紫荆山茶余・里禄二村。この業は康熙末年に買受け、雍正初年に收税。世々先疇に服し、まさに國課に勤め、定めて六月をもって完糧、十月收租。公を先にし、私を後とするなり。田租の外、べつに山租あり。凡そ承批種植する者は、山中出息すること三七派分。ただこれ祖宗の業にして、外人は固より霸佔を得ず、同族もまた豈に偏私を得んや。自後族人で山場にて種植を欲する（者）は、均しく須く立約して輸租。庶の財力ある者が故なく公を并せて私に入れたり、財力なき者が懷嫉して争いを起こしてはならぬ。凡そ田租を収めるには、經理の者が簿に按じて發秤する。秤は行針を用い、浮収を得ず。入った租穀は来年の公費に存貯える外、余穀を分給して四大房の貯える所とし、所分の数は隨時酌定する。およそ山租を収めるは定期なく、得たところの租銀は隨時登記する。二項の穀石銀両は、春間墓祭が告畢る日・仲秋家祭の時に衆の査算を経、有余は存貯して用に備える。その經理の人は、首に公正な族長を推し、次に賢能の宗子を推す。無ければ族中の殷实なる者を推し、（さらに）無ければ族人の謹厚な者を推す。毎年酬金を酌送し、もって責任を専らとせよ<sup>23)</sup>。

以上は古程黃氏が深水茶余・里六に設けた祭田に関する規約であるが、早くも「康熙末年買受、雍正初年収税」がなされている。ここで特徴的なことは、祭田の經營が「族長」「賢能宗子」「殷实者」を擁した金田側の有力諸房のイニシアチブの下で行なわれた点で、紫荆で耕作に携わる「族人」は「承批種植」「立約輸租」する佃戸であり、「懷嫉起争」するこ

とは許されなかった。毎年の納租は「六月完糧、十月収租」の2度、「納糧を含めて一年に二度収租した」という軍営藍氏・那郷盤氏の供述と一致する<sup>24)</sup>。また田租のほかに肉桂や藍・雑糧などを対象とした「山租」があり、収穫のたび銀に代えて納租した。その率は「三七派分」、佃戸が7割を得るとあるが、「山中の瘦田磯地」のこと、必ずしも彼らに有利とは言い切れない。むしろ一般には「山中は江から距ることすでに遠く、故に佃租は必ず毎石二十觔を加え、もって田主運銷の費に作<sup>25)</sup>」ると、その負担は平地の佃戸以上に重かった。総じて紫荆の開発は金田・江口一帯の動向と無関係ではあり得ず、「客籍」エリート地主の支配は山内の経済においても貫徹していたのである。

## 3

こうして初期移住者集団が一応の定着を遂げた乾隆年間、紫荆の開拓史は新たな局面を迎えた。それは客家——「咬話」を話す漢族の大量移入である。

客家は中国移民史の中で、特異な位置を占める人々である。中原から遷って来たという意識を持ち、閩贛粵交界地区に集住した彼らは、宋末から明初にかけて広東東北部の嘉応州に進出、ここを根拠地に広東各地・広西・湖南・四川・台湾、そして東南アジアへと移住していった。広西では陸川・博白2県に広い居住区を持ち、貴県などがこれに次ぐ。中には陸川の望族呂氏のように、明初成化年間に福建汀州府上杭県から移って来た例などもあるが、一般に移住年代は清代以後、乾隆から道光年間に集中している。桂平の客家人口は全県の10分の1強、明代に開発の進んだ潯江南岸には少なく、大多数は北岸五郷に「講白話」「講壯話」の人々と雜居して定着した<sup>26)</sup>。

紫荆は桂平北岸諸郷の中でも、客家の全郷人口に占める比率が最も高い。その原因もまた、彼らの移住時期と関係がある。乾隆十三年(1748)の西山龍華寺『租糧碑記』に「宣二里永洁戸(江口胡村)糧米九斗三升、今毎年租穀五千斤を収めるに止まる。……或いは佃戸に隠匿され、稽査のしようがなかった。乾隆四年(1739)におよび、各佃が互に訟を興し

て耕を争い、控府叩県、紛々として一ならず。差役の査勘を蒙批り……べつに招佃を行なう。林兆蘭らは田土の寛廣なるを見たため、共議して租穀三千斤を加えた。この時佃人常中らがおり、自ら承耕を願い、新旧共租穀八千斤、向に収めて異なし。不意に去春三月内、各佃はまた復び執を争って訟を致す。……各佃戸は亦た加租を自願い、共で租穀を増やすこと三千七百七十斤、……胡村の大小共田五百七十八塙、租穀は一万一千七百七十斤<sup>27)</sup> とあるように、すでに乾隆初年、ふもとの平原諸郷は人口増加のため耕佃権をめぐる競争が激しくなっており、遅れて遷って来た客家はしばしば条件の悪い山内に定着せざるを得なかった。東王楊秀清一家はその典型的な例で、彼らの祖籍は廣東嘉応州、雍正年間に曾祖父が先ず金田一帯に至ったが、ここに定着することが出来ず、「翻山越嶺、平陰山の東旺冲に深入り、開荒種山、柴を砍り炭を焼き、やっと落ち着くことが出来た」という<sup>28)</sup>。

現在紫荆の客家のうち、族譜で確認出来る最も早い移住例は大坪山頂の劉氏で、「劉元公。此祖原籍江西長寧県(現尋烏県)双橋堡大洞村。乾隆四年(1739)、広西尋州府桂平県宣二里紫荆山山頂村に移居、創業立基」<sup>29)</sup>とある。だがのちの紫荆の歴史に最も大きな影響力を持ち、我々の注目を引くのは石人・石狗を中心とする王氏であろう。彼らはもと廣東嘉応州(梅県)松源郷寨樓岡の人。紫荆始祖の経歴を綴った『達瑞公遺囑』は次のような興味深い記事を載せている。

十四世桂松公は一子を生み、達瑞と名づける。……十一歳にして父を失い、冷丁孤苦。祖父は立錐の地を全く残さず、まさに浮萍の人なり。……廿二・三歳に至り、幸いにも天の垂憐を托するを得、貴人契爺鍾公の一生食斎するに遇い、吾人の孤なるを看、種痘を助け、事事維持した。二十四歳に至り、定親食糧、当兵して王膽と名のり、在營二十八年。……雍正三年(1725)……冬、坊祖堂を整えて双堂としたが、格に合わず、人財両空させるを致す。死ぬ者は死に、走る者は走り、流離して所を失い、冷落ここに至る。三十三歳壬子年(雍正十年・1732)八月内、娶室して祖堂の家室に居住し、看守すること四年。乙卯年(雍正十三年・1736)春に至り、室をつれて鎮平県南門外に至って、營内の兄弟と各々家室あり、門を共にして出入りした。……居住すること八載、長男七歳、礎頭寨樓岡に搬回り、本家祖叔

公の門下と同居した。……甲戌年（乾隆十九年・1754）,（達）瑞年五十有五に至り, 長男剛斗年十九歳をつれ, 前んで潯州府桂平県子京〔紫荆〕山に至り, 種作生理。戊寅年（乾隆二十三年・1758）二月に至り, 次男文斗年十四歳もまた来る。次年己卯（乾隆二十四年・1759）に至り, 家室また到る。のち武宣属花雷村紫荆山右水石狗坪および各処坑に向い, 開荒種作。己卯冬をもって, 山主花雷村雷発印が承けた父雷興霸戸の糧米六石, 今有の石狗坪および各処坑に前至り, その開荒に隨い, 杉等の項を種えた。初年鋤種するに, 粮銀一両を帮けた。田腴の日には, 粮米を帮うこと四百觔, 粮銀三錢。批する所の語は任せて永遠の種作に由る。本年十一月内に至り, 屋を做的。庚辰年（乾隆二十五年・1760）正月に至り, 二男と先に至って安頓, 冬に至り合家まさに老山に搬り種作, 前来んで開荒の所に安居した。過年姜芋・雑糧を鋤種, 每年圳を開き壩を整え, 至就の時には方に咸な栽種。庚辰から甲申（乾隆二十九年・1764）までは, 朝早くから夜遅くまで仕事に励まぬ日はなかった。開荒は将に成り, もって庚辰年より糧禾を帮納すること四百觔, 粮銀三錢。永遠にかくの如し<sup>30)</sup>。

王達瑞は康熙三十八年（1700）生れ, 長く兵役に充ったのち, 乾隆十九年（1754）, 紫荆に移って来た。のち王作新の堂兄王大作が道光四年（1824）に記した『紫荆山文』にも「我が曾祖粵東よりここに移り, 今七十年」<sup>31)</sup>とあり, 両者の記載内容は符合する。この『遺囑』は客家の移住のあり方をめぐり, 様々な論点を提供してくれるが, その中で先ず指摘すべきことは, 彼らが紫荆に入る以前, 原籍地廣東における流動性の強さであろう。王達瑞の場合「冷丁孤苦」「流離失所」して鎮平県（現蕉嶺県）と梅県の間を往来した。同じことは大冲曾家の始祖曾梅西についても言え, 『武城曾氏族譜』所収の『曾梅西公伝——遷西源流序』は「梅西公……廣東嘉応州摺洋〔潮州府揭陽県〕梅子墩に生れる。桑梓は里人稠く, 貧苦なる者は衣食継ぎ難いのを見て, 壮歳の時, 姉や揭家の子婦と偕に湖廣衡州府鄆県七都山に徙った。居むこと五載, 謝妣は終え, 晚子は没し, 長媳李氏も死んだ。公は淒涼落寞はなはだしく, 子を携えて摺洋梅子墩に復回った。居ること二載, また二子を携えて（広）西に來たり, 三子は著公家に寄けて養った。來たりて潯郡に至ったが, 囊には分文もなく,

東奔西馳, 労碌して家なし」<sup>32)</sup>と, 一度湖南への移住を試み, 失敗した事実を告げている。勿論彼ら客家に移住を強いた最大の理由は「桑梓里人稠, 貧苦者衣食難繼」という原籍地の社会的条件と「人財両空」「無留下立錐之地」だった彼らの生活情況にある。だが同時に「男子にして生涯を通じ家庭内に躊躇するは指弾せらるる所であって, 必ず出稼のため故郷を離れ, 相当期間を経て錦を飾って帰郷するをその本懐としている」<sup>33)</sup>といった主観的要因もまた無視できない。それはしばしば「浮萍之人」となった彼らへの違和感を隠さず, これを闇入者とみなした「本地人」の視線に抗して生まれた自己認識であったが, 「年深まれば外境も皆吾境, 日久しくすれば他郷も即ち故郷」<sup>34)</sup>の家訓などを通して伝えられた「東奔西馳」の体験は, 彼らが危険を伴なう移住へと踏み切る過程において, 少なからぬ役割を果したと言い得よう。

この『遺囑』はまた, 王達瑞が紫荆に移ってからの数年間について詳細な記録を残している。ここで先ず目につくのは, 彼が長男剛斗を連れて入山してから次男文斗・妻黃氏が至り, 「做屋」するまで5年の歳月がかかっている点だろう。これは初め「工作を尋覓し, この地が謀生し易いと感覺じると, 遂に家小を并せて遷来り, 留って去らない」<sup>35)</sup>ためで, 農・商業移民を問わず多見する一種の移住戦略である。この間も彼らは「開荒種作」, のち「田腴之日」を見越した「帮納糧米」の契約（台湾の給墾字と同質のものであろう）を結ぶと「毎年開拋整壩」, 本格的な開墾に着手した。一般に客家は「頗る水利を講じ, 陂池を築き, 碩瘠を化えて膏腴にする。その人は兼耐勤苦, 隣に棄地なく, 脣に宿草なく, 一望にして彼の田業たるを知る」<sup>36)</sup>と, 優れた農業技術を持った, 勤勉な人々と言われている。達瑞もまた「朝早くから夜遅くまで仕事に励まぬ日はなかった」が, 当時の「紫荆は, その田皆荒壩なり。百尺の木が嶺を堆め野を塞ぎ, 豈に今日の瞿翟たらんや」<sup>37)</sup>と, その開墾には数年を要した。彼らは「姜芋・雑糧」を植えて食糧にあてる一方, 次男文斗は石人に移住, 鴨の養殖で小康を得た。彼は東閣・東賢・東城・東濤を生み, 石狗の長男剛斗も東伯・東勝・東仁をもうけ, 古灘に移った東垣・東泮などを含めて「十東」を称し, 人口も増えた。このうち東城・東賢がそれぞれ作新・大作の父となる<sup>38)</sup>。

ところで王文斗とその子東城は, 王家の紫荆における発展の過程で重

要な役割を果した。そのきっかけは『遺囑』にある「山主花雷村雷」氏の一族、雷文賢との争いであった。雷家は元来武宣県東郷波斗の人、祖籍山東の伝説を持つ、典型的なチワン族である。清初、文中にも名のある雷興霸の時に紫荆に入り、花雷村を開いた。往時雷氏は蒙冲から花雷、さらに象州に向けて広大な山地を所有、四門から成る屋敷を構えたという<sup>39)</sup>。王達瑞も彼らの土地を開墾したのであり、「初年鋤種、帮糧銀一両。田腴之日、帮糧米四百觔、糧銀三錢。所批之語、任由永遠種作」とあるように、実際は雷家の佃戸に他ならなかった。両家の争いの発端は、雷家が契約の条文外に王家の人々が植えた肉桂の利益を租として納めるよう迫ったためとも、王家が新墾地の納税猶予の法令を盾に、上記額の納租を拒否したためとも伝えられている。双方はそれぞれ武宣県に控訴（当時花雷・石狗は武宣轄）したが、訴訟は長びき、数十年に及んだ。人々が一致して語るところによれば、「王文斗・雷文賢は共に7歳になる子供がおり、最後にこの2人が県庭に呼び出されることになった。知県は2人の子に餅を与え、王家の子はこれを食べたが、雷家の子は食べなかった。知県はこれを見、王家は将来必ず成功し、雷家の財産をも食い尽くすに違いないと考え、ついに王家の方に軍配を上げた」という<sup>40)</sup>。

この王・雷両家の争いは、のちに武宣東郷で熾烈な械闘に発展するチワン族と客家の「土客」対立の性質を色濃く帯びている。だが早くから漢族の影響力が強かった紫荆では、社会矛盾は同じ形をとって収斂せず、むしろ漢族内部、とりわけ同じ客家同士の土地所有をめぐる争いとなって現出した。王氏は雷家との争いに勝利した後、東城の代に至って急速に発展、軍營付近に1万斤租（約50畝）の水田を得、数十畝の祀田を置き、文斗が建てた宗祠を重修、書館を設けた<sup>41)</sup>。この過程で蒙冲趙家（当時「講社話」化していた広東人）と風水をめぐって争い、これを茶地へと走らせた事実は、前節でも触れたとおりである。そしてこの王家の成長過程における、他氏との土地紛糾の最後に位置するのが、大沖曾開文一族と王作新の争いであった。曾氏は潮州府揭陽県出身の客家、「乾隆二十五年（1760）、広西省潯州府桂平県紫荆山霸沢村に遷來」った。この曾氏の定着過程もまた興味深い。始祖曾梅西は「來たりて潯郡に至ったが、……のち宣市（金田新墟）に至り、生理すること年余。尋ねて紫荆山の三江（墟）に到って舗を開き、生理は順利、ついに造屋宇家した。田

産を購置き、業を営み読書耕種」<sup>42)</sup>と商業を通じて紫荆に定着、王家の場合と好対照をなしている。旧時三江墟は「大小舗戸十数間」の小墟であったが、江口・新墟と武宣の東郷・三里両墟を結ぶ商業ルートにあたり、「この路新墟の上游に据し、山貨は皆ここに源する。この山の藍と象（州）・武・来賓・遷江の牛は、尤も大宗」といわれ、「東郷の米石」もまたここを通して広東に運ばれた<sup>43)</sup>。一般に客家の商業活動は優勢な広東商人の陰に隠れて目立たないが、彼らの影響力が比較的弱い桂西北では客家商人も少なくない。民国『三江県志』は「本県の客家人、明末に廣東嘉応州、あるいは福建・江西等地より来たる。各市鎮に散居し、善く経商。厚利を博し、一地に至るたび率ね多く富を致す」<sup>44)</sup>と述べ、金田でも咸豐年間に「貿易して千金を致」した興寧客家張全安の例がある<sup>45)</sup>。梅西らが初め手がけたのは「殺猪」とあったといい、のちヤオ族と「打老同」して頻繁に往来、ここに山貨をも扱ったようである。彼らは初め三江墟付近の霸沢村に住んだが、長男綱正が「太沖に遷って、農に務め耕種。白手から家を成し、田産竹木を貽した」ほか、次男連正・三男蘭正も「田産を置き、屋宇を建て、空手發家、千金を後に裕した」「勤苦農耕、田産を置き、谷種三百余斤」<sup>46)</sup>と、蒙冲方面に勢力を伸ばした。曾開文は綱正の長子にあたり、その墓表には「胞弟有五、堂弟有十、妻続二、男を生むこと六。……宗祠を倡建、合族祔式。祖塋を修置し、先靈は安吉。嘗祀を増産、祠墓は益を受く。創業成家、先に勞して後に逸」<sup>47)</sup>とあり、かなり安定した基礎を築き上げつつあった。道光元年（1821）に王東城が倡建、みずからその序文を記した『始建三聖宮碑記』（馮雲山らが打ち壊した蒙冲雷廟）も「總理王東城、助錢二千五百文。經理曾開文、助錢一千四百文。縁首趙士芳（茶地趙家の族人）、助錢一千五百文。曾開俊（開文の弟、妻楊氏——楊秀清の一族との説あり——との間に生んだ子玉珍と孫雲正は、初期拜上帝会の積極活動分子となる）、助錢二千三百文」<sup>48)</sup>と述べ、一方で石人王家の優位を伝えながらも、また同時に大沖曾家・茶地趙家が当時の紫荆西部において侮りがたい実力を有していた事実を、はっきりと示している。

王・曾両家の確執は、蒙冲の数十畝にわたる耕地の帰属をめぐって起ったという。のち馮雲山らがこの紛糾に介入、王作新が雲山を訴え、また團練を率いて太平軍と戦った経緯もあって、以後両家は建国後も永

く通婚しない程の積怨を結ぶに至る<sup>49)</sup>。ではこの一見強引にしか見えない石人王氏の急成長を可能にし、これを性格づけたものは何であったのだろうか。まず一つの事実として「一門三秀才」を称した作新（庠生）、大作、作新の弟作賓を初め、大作の弟大寛、子徳裕（以上みな廩生）、徳欽（同治武宣県舉人）、作新の子欽元、良元、鵬元（共に庠生）など、王家が数多くの科挙エリート予備軍を輩出した点が挙げられる<sup>50)</sup>。これは「身未だ宮牆に列しなかった」曾開文一族や花雷雷家と顕著に異なる特徴で、「捐監生」だった趙振元、同治年間に武舉人劉克建を出した大坪山頂劉家と比べても、その優勢は明白である<sup>51)</sup>。もちろんそれは彼らの成長の結果でもあり、また早くから多くの官僚を生み、権勢をふるった金田の有力諸族と同列には論じられない。だがこの強いエリート志向は、客家王氏にある特殊な性格を付与することになった。古程『黃氏族譜』は庠生黃翔（挙人体正の甥）の三女「五妹」について「道光元年（1821）生、武宣界石人村王書勲（作新の子と同一輩）の長子に適ぐ」<sup>52)</sup>と述べており、彼らは古程黃氏のほか烟村仇姓（この族人仇璫は安良約「鄉耆」第六名）、莫村許兆熊（監生。族人兆渠・兆梁は共に道光挙人、安良約に参加）、武宣三里台村陳家などと姻戚関係を結んでいた。また大作の子徳欽が書いた『写去嘉応州信稿』には「わが門生黄榜書（光緒進士）・陳德三（光緒挙人）入京して会試、其れに托して查明」と記され、彼が古練黃、下江頭陳両氏と交際していたことがわかる<sup>53)</sup>。つまり王家は「秀才」の資格を通じて山外の有力諸氏と密接な関係を持っていたのである、道光二十四年（1844）の『重建宣里新墟三界祖廟碑記』に王大作の名があるのもこのためである<sup>54)</sup>。それはまた、彼らが「客籍」エリート集団の隊列に加わり、その一翼を担うことによって紫荆における支配権を獲得、維持したことを意味する。光緒『潯州府志』は金田団營後、太平軍が「武宣から回竄るや、作新は団（練）を集めて助剿。その子季元・侄伯元・仲元・士元と武生羅思揚・思展、童生羅浩・羅啓生らは皆陣亡」<sup>55)</sup>と彼らが金田の望族羅氏と共同して交戦したと伝えるが、この事実もまた石人王家の置かれた位相を鮮やかに示している。

以上のように、太平天国前夜すでに客家を主とする漢族移住民は紫荆に深く根をおろし、政治・経済の両面で主導権を握っていた。新興の開拓地では多くの労働力が必要とされたため、彼らの人口増加率も高く、曾開文とその父綱正が共に6子をもうけ、王東城・作新親子も同様に6人ずつ息子を生むなど、族人の数は急速に増えた。馮雲山が山内に入った時、働きかけた対象はこの客家だったのであり、2千を数えたと言われる拜上帝会の会員が多く彼らによって占められていたことは疑えない事実である<sup>56)</sup>。

だが、拜上帝会に参加したのは如何なる人々であったのか——実を言えば我々の考察はこの肝腎な問題に、いまだ十分な解答を提出したとは言い難い。なぜなら先に取り上げた人々の多くは太平軍と敵対した王作新一家を含め、必ずしも拜上帝会の蜂起に積極的態度を示していないからである。例えば大冲曾家の場合「上帝を信ずることまことに篤く、偶像を拝まなかったばかりか、常に偶像を愚弄輕蔑し、人々が彼は氣狂いだといつても決してためらったり、疑ったりしなかった」<sup>57)</sup> 曾雲正を出し、また曾玉環（曾開文六男）・開錦（開文弟）などが太平軍に参加している。また曾開文自身も「時に錢・米で彼らを助けた」が、「当時家境は割合良」かった曾家の多くの人々は太平軍への参加を望まず、雲正の父玉珍も結局は蜂起に加わらなかった<sup>58)</sup>。玉珍の弟玉璫に至っては『天兄聖旨』の中で「曾玉璫は十分可憐い。彼は横に恃んで黎添寬を打ち、今まで黎添寬を告えようとしている」<sup>59)</sup> と指弾を受けている。少なくとも彼らの参加状況は「楊晚は兄弟六人、楊亞藍・楊亞三・楊亞日・楊亞段・楊亞清・その子楊亞二、合家男女連せて十七・八人、均しく去きて拜会」<sup>60)</sup> した鵬隘山楊家などと比べたとき、遙色は免れ難く、以後の太平天国の歴史において曾家の人々はその姿を消してしまう。茶地趙家・花雷雷家が示した態度も大同小異で、「紫荆山各地の有錢人も、當時はあえて従わない者はなかった。大坪村の温四公（温宏開、當時温家は石人王家と姻戚関係を結んでおり、宏開は王作新の外甥であった）は最も有錢で、初め

ははっきりした態度を示さなかった。洪秀全が……彼に二十四担の銀子を出すよう指定すると、温四公は人々が皆従ったのを見て、しぶしぶ金を出すほかはなかった<sup>61)</sup> という口述は、当時の彼らの反応をかなりうまく言い当てている。

実際に太平軍に参加した人々の多くは「合家男女」、一家を挙げて軍に加わったため、現在紫荆にその子孫はおらず、彼らについて調査することは不可能に近い。従って限られた材料の中から推測を重ねるほかはないのであるが、その一つに清軍に捕えられた無名会員李進富の供述がある。彼は当時「二十八歳、桂平県鵬隘山人、祖籍廣東嘉應州、父母は俱に故く、兄弟二人。哥子は李細妹、小的は第二。并して妻子なし。三十年（1850）八月内、哥子と一緒に拜尚弟会に去く」と、やはり廣東から移住した客家であった<sup>62)</sup>。鵬隘山で発見された『建造仏子路碑』（道光二十四年・1844）には蕭朝貴の父蔣万興と共に李增富・李增華・李恰合の名が見えるが、「助銭」額も少なく<sup>63)</sup>、王・曾家とは異なる階層の人だったようである。供述の中で彼は「并無妻子」と、28歳でなお独身だったと述べている。これは一見家族への追及を免れるための嘘に見えるが、フロンティア地区は往々にして男女人口のバランスを欠き、貧者ほど結婚難に陥る傾向が強いので、あながちデタラメとも言い切れない。すでに紹介した黄泥冲の黄家が良い例で、彼らは金田・南木・蒙墟など山外で相手を探さなければならなかつた。さてこの黄家もまた、廣東三禍竹（遠くは福建）から移ってきた客家で、族人黄亜開が太平軍に参加している。黄泥冲に簡単な香火堂を持つほかは、族譜・墓の石碑もなく、経済的に相当困難だったことがわかる。彼らは「父を拜三点（天地会、旧時紫荆では同会の活動が盛んで、軍営村の羊届坪で拜会、同村の藍保華などが参加した）に連れ去られ、難を避けて大坪・三江、最後は金田に至り、やっと黄泥冲に戻ってきた」と各地を転々とした。さらに注目すべきは「ここに代々住み続けたのは黄姓だけだが、一時期張・范・趙・思・曾姓の者が住んだことがある。彼らは皆土地を持たず、山を耕したが、暫くするとどこかに去っていった」という事実である<sup>64)</sup>。当時紫荆には未だ定住に成功せぬ移住民が数多くおり、一定期間ごとに移動を繰り返しながら、種藍・焼炭など山中の労働に従事した。過坑冲の客家張姓（貧しく壳材・焼炭で生活、馮雲山は古林社の同族の紹介で先ずここに至り、1年間住んだ）や、

初期拜上帝会の活動家のひとり盧六はこうした人々であったと考えられ、大きくみれば鵬隘山の李姓・楊秀清・蕭朝貴一家もその中に数えてよいであろう。蕭朝貴の場合、兄弟4人が皆故郷を離れ「打工」、紫荆の中だけで花雷・六盤と渉り歩き、最後鵬隘山で楊秀清と共に焼炭業を営んだという<sup>65)</sup>。

こうして見ると拜上帝会の中核を担ったのは、同じ客家を主とする移住民の中でもいまだ安定した基盤を築き得ず、程度の差こそあれ原籍地以来の流動性を引きずった人々であったと言えよう。彼らは定着に十分なまでの土地・資本を持たず、石人王家に代表される山内・外地主の佃戸として「耕田種山」、種藍・焼炭でその生計を補った。だが「山間は佃衆く田稀く、供は求に及ばず、耕を謀ること急切なため、租約は必ず重い。……もし租が短供すれば、『佃を易えるぞ』の声が立ちどころに至る。舟舶の通じない地に処るので、力 檻の外に謀生の路は少ない。……ゆえに田を乞いて耕し、暗かに争競を滋し、あえて租を負さないばかりか、期に先立って繳め、また錢を奉めて質とする。このため児女を鬻ってしまう者も、往々にしている<sup>66)</sup> とその生活の条件は厳しく、常に破産＝再移住の可能性と隣り合わせで、不安を払拭することが出来なかつた。拜上帝会の「毎日飯を食うたびに『感謝上帝、有衣有食』の二句を口念えた<sup>67)</sup> と一見平凡に映る教理が強い吸引力を持ったのは、それが彼らにとって切実な願いだったからである。また拜上帝会が蜂起する過程において決定的な役割を果した楊秀清・蕭朝貴の「天父天兄下凡」（「降儕」と呼ばれるシャマニズムの変形）も、彼らのこうした存在形態と無関係ではない。ハンバーグ『洪秀全の幻想』は「信徒が跪いて祈禱している時に、出席者のあるものが突然の発作に襲われ、地上に倒れ、全身汗を流していたというようなことが時に起こつた。かかる昏睡状態の中に、靈にのり移られて、すすめの言葉・叱責・予言等々を発した」と、楊・蕭2人のほかに多くの会員が同様の症状を起こしたと伝えている<sup>68)</sup>。一般にこの「降儕」は、不安定要素の多い時代・地域・階層ほど流行するという<sup>69)</sup>。光緒『貴県志』は「これ女巫の類なり。あるいは男子をもって冒充り、無恥なること尤も甚しい。鄉落間にあっては多く惠・潮・嘉の客民に属し、城廬では土著がこれを效尤る<sup>70)</sup> と、客家を主とする新来の移住民に多く見られたことを指摘しているが、彼らが置かれ

た境遇を考えれば、それも決して偶然ではなかった。とりわけ新興の開拓地で、諸民族が雑居する紫荆は不安定な要因が多く、また王・曾两家の争いに見られるように山内の権力関係も完結していなかったから、拝上帝会の成長過程で「天父天兄下凡」が洪秀全の意図を超えて大きな影響力を持ち、また多くの者が「乱言」を発して「兄弟達の間に騒動と軋轢」が起きたのも避け難いことであった。記録によれば「黃氏の一族の1人はイエスの教えにもとったことを言い、多くの人を迷わしたが、彼は拝上帝会から除名された」といい、また謝享礼・陳仕剛・李某などが下凡した天兄から厳しい処罰を受けている<sup>71)</sup>。

ところで紫荆の拝上帝会について語る時、避けて通ることの出来ない問題の一つにチワン・ヤオ族の少数民族と拝上帝会の関係がある。この内「講壯話」の人々については、本稿でもすでに幾度か触れてきた。漢族が優勢を占めた紫荆では彼らの漢化もはなはだしく、言語を除くと民族的特徴は希薄で、通婚も「壯・漢を分けな」かった。また言語についても、「客籍に対しては廣東平話（白話）を作す」<sup>72)</sup>と早くから二重言語生活をしていたようである。太平天国の中心人物のうち蕭朝貴の出身地武宣東郷上武蘭村は「講壯話」の村であるが、朝貴自身は『天兄聖旨』の中で相当流暢な客家語を話している<sup>73)</sup>。彼の妻は「男学馮雲山、女学楊雲嬌」と言われた客家楊秀清の妹（のち改名して洪宣嬌）であり、彼のほかにも花雷雷家・茶地趙家など「講壯話」の人々が楊秀清一家と婚姻関係を結んでいたという。こうした状況の下では、彼ら「講壯話」の間に拝上帝会の参加者がいたことは、むしろ自然の結果とも言え、軍営村の尚姓が漢族会員と同じく家産を陳姓に売り払い、一族数十人挙げて太平軍に参加したほか、沙田の倫姓からも一部が参加、太平軍の「小頭目」を出している<sup>74)</sup>。だがそれは両者の間に全く差異がなかったという意味ではない。紫荆でも往々にして貧しかった彼らに対する差別的雰囲気はやはり存在し、「獵怙佬」の呼称も用いられた。宗教信仰についても区別が見られ、茶地（壯漢雜居村）には過去二つの土地廟があり、うち一方は韋・陸姓のチワン族だけが拝み、漢族や趙家（これもまた、元来彼らが漢族であったことを物語る）は拝まなかった。それゆえ拝上帝会の活動に対しても、両者の態度にはやはり一定の違いがあったようで、少数の事例を除くと「獵人近く本業に務めない者あり。客籍の爛巖と互相に朋比、連

絡して群を成す」といわれた破産した佃農チワンの個別参加が主流を占めたようである<sup>75)</sup>。

一方ヤオ族についてはどうだろうか。現在1千3百を数える紫荆のヤオ族のうち大部分を占める木山盤瑤は、1932年瑤王李栄保（旧姓馮、新桂系軍閥李宗仁と結び改姓）の時に良段から移った人々で、早くから漢化教育が行なわれたため、風俗習慣の変化は著しい。李栄保の家も中規模の漢式住居で、建国時150畝の耕地（現在320畝。無論自給には程遠く、全村収入の半分は林業による）を開墾していた。他方良段は三江墟を去ること「七十華里」（約6時間）、紫荆北端の高山上に位置し、現在も水田はゼロで中等教育も普及せず、時おり大坪墟（ダム竣工後新設）に山貨を売りに来る以外は閉鎖的な生活を送っているという<sup>76)</sup>。『桂平県志』に「宣二里紫荆山の北、即ち板猺の聚る所」とあるのは彼らのこと、当時「過山耕種、一・二年して地力尽きたと見るや、輒ち去る。去るにはこれを火して草を炙り肥にし、石を畳んで記とする。一・二年後復び帰って種植、これを打寮という」<sup>77)</sup>と、周期的移動を伴なう焼畠農耕を営んでいたようである。

この良段盤瑤、趙・李2姓を主とするが、うち李・鄧姓から20人程が太平軍に参加したという。一般にヤオ・漢両民族は「時に往来があったが、今は寥寥として幾許もない」とされ、双方の密接な関係を語る史料は多くない。もちろん漢族定住の過程で両者は没交渉だった訳ではなく、「生獵は華と通じないが、熟獵は常出し、平民と交易する」と、「過山ヤオ」の彼らとは別に「平地獵」と呼ばれる人々があり、江口などで古くから漢族と交易を行なっていた<sup>78)</sup>。だが今紫荆の盤瑤に限れば、「山を批して種植、誠実で欺かない」租佃契約を除くと両者の接触は極く稀れで、金田の漢族は言わずもがな、山内でも石人王家などは全く交際がなかった。またチワン・ヤオ族の間も「近歳多く野獸が嶺禾・芋薯を践食するので、各種土着の獵人は猺人を招致して來山させ、その弩箭礮火に藉りて悪物を駆除しようと欲するが、至る物は罕か」と関係は疎遠で、軍営の藍・陳両姓ともヤオ族と通婚していない<sup>79)</sup>。こうした中で、彼らヤオ族が拝上帝会に参加することを可能にした要因は何であったのだろうか。大冲曾家の場合、ヤオ族と「打老同」して頻繁に往来したといい、ここからヤオ族の学童が曾家の私塾で馮雲山の授業を受けたとの伝説も

生まれた。だが彼らの交際は「客で桂皮を採買しようとする者は、必ず餽るに嗜好の物をもってする。(ヤオ族は)喜んで延待すこと甚だ恭しく、購うところの桂も、必ず佳すうえその価も廉い」といった商業上の目的に基づくもので、これを直ちに一般化することはできない<sup>80)</sup>。むしろ両者の関係において重要な役割を果したのは「上門」、即ち漢族男性のヤオ族家庭への婿入り婚であったようだ。漢族社会で最も不名誉とされるこの「上門」は、旧時ヤオ・漢族間に行なわれた唯一の婚姻形態であったが、山上の労働は苛酷なうえ、ヤオ族社会での男性の地位は漢族のように高くないため、多少とも経済的基礎のある漢族男性はこれを望まず、応じたのは皆「光棍」、嫁の来手がない素寒貧(建国後一時期は「出身不好」の地主子弟)であったという<sup>81)</sup>。紫荆の場合、王・曾・趙家の人々で「上門」した例はなく、多くは金田・江口、遠くは平南・貴県・武宣から来た貧農層であったが、逆に山内でも黄泥冲黃家などは「相当多く」「上門」の例を出していた<sup>82)</sup>。この事実は拜上帝会の参加者が「并無妻子」だった李進富を始めとして、多く安定した基盤を持たない「種山の民」だったことを考えるとき、一定の示唆を与えてくれる。すなわち「上門」を通じてしばしばヤオ族と婚姻関係を結んだ人々こそは、拜上帝会がその基礎にえた階層に他ならなかった。加えて彼らは同じく「批山耕種」の民であり、焼炭・種藍など山中での労働を通して接触の機会も比較的多かった。こう考えた時初めて、拜上帝会とヤオ族を結びつけた糸が見えてくる。無論その糸は細く、決して多くのヤオ族を糾合するには至らず、記録にも残らなかつたが、確かに両者は共通の基盤を持っていたと言ひ得るのである。

### 結びにかえて

桂平に来るたびいつも思うことだが、ここはまさに広東の支配する町である。広州の下町を小さくしたような「老街」(旧市街)の造りは言うまでもない。毎日広東局のテレビを見、さして美味しい広州製タバコを好んで吸う桂平の人々の生活は、南寧や桂林に比べて広州文化圏の影響が著しい。實際には広東近隣諸県からの「搶買」を含め、「広西工資、

廣東物価」と言われる生活水準の格差に苦しみ、広州の繁栄は必ずしも彼らに恩恵をもたらしていないのだが、やはり北京でも上海でもなく、広州こそが人々にとってあこがれの的である。桂平の人はよく「俺達の白話は貴県や鬱林より広州話に近い」と自慢する。広東から移り、故郷以来の遺産を一つでも多く残していることが、彼らのアイデンティティーを支えているかのようだ。

李進富はこんなことを言っている。

大頭子・二頭子は共に花県の人で……初め「東省を東京、ここを西京とし、到去って興旺、<sup>きんこう</sup>大家で福を享けよう。言うまでもないことが、万一打敗たら、<sup>まけ</sup><sup>イギリス</sup>嘆哈喇國に投じてもいい」と言っていた<sup>83)</sup>。

この一節、事実かどうかはさておき、当時の人々の「世界」感覚を端的に示している。また楊雲嬌も「重病に陥っていたとき、自分はあたかも死んだように病床に横たわっていたが、その間に靈魂は天に昇り、一老人が自分に向かって『今より十年の後、東方より一人の男が来たり、汝に神を崇拜せよと説くであろう。汝は進んで彼の説くところに従え』と言ふのを聞いた」という。旧時広西では広東羅定から来た「風水先生」が靈験あらたかとされ、最も尊重されていた。洪秀全もまた病人を治し未来を予知する異人として、信徒の間に絶対的な威信を持ったが、それは馮雲山の地道な布教の成果であると共に、彼が「廣東洪先生」であつたればこそその事なのかも知れない<sup>84)</sup>。

拜上帝会の勃興に、客家の果した役割は大きい。無論洪秀全の思想が「客家も本地人もみな同じように遇される」<sup>85)</sup>と土客の区別を越えた普遍性を求めたように、拜上帝会の活動とその性質も「客家」の枠を大きくはみ出している。人々が「嘆哈喇國」の新宗教を抵抗なく受け入れた理由も、多民族雜居区の文化的風土抜きには語れない。だが一方で太平天国を特徴づけるいくつかの制度・思想について「尋根」、その根元を探る時、客家の生活習慣に行き当るのもまた事実である。男女がともに田地を割り当てられる『天朝田畝制度』の均田思想と、女性が纏足せず、男同様農作業に従事する客家の風俗との関連は言うまでもない。「懺悔の後、彼は跪き、清らかな水をたたえた大きな水盤から、コップに一杯ずつの水が各人の頭に注がれ、『洗淨從前罪惡、除旧生新』の文句が唱えられる。再び起ち上がって、例に従って茶を飲み、各々水で胸及び心臓

の部分を洗い、以てその心の中をも洗い淨めたことを示す<sup>186)</sup> 拝上帝会の入会儀礼も、元を正せば除夕の晩にユズ湯で体を清め、「破旧立新」を祈る客家の習俗から来ている。そもそも天父・天兄とその弟洪秀全が天上に家族を持ち、また全ての人々が天父のもと「一に帰する」と主張した奇妙で排他的な一神教の教義も、「帰宗觀念」の強い客家の祖先崇拜に照らして見たとき一番わかりやすい。金田団營の後、紫荆の客家達は家族を挙げて南京へと旅立ったが、その困難な行軍が可能になったのも、彼らがもと「東奔西馳」の体験を持つ「浮萍之人」であったからと言いたい。もし彼ら客家にとって天京への行程は、遙かな「小天堂」に向かっての移住に他ならなかったとしたら、果して言い過ぎであろうか。

夕陽に映える紫荆の山並みは、いまも静寂の中から我々に多くのことを語ってやまない。

## 註

本稿は 1987 年から 2 年半にわたる広西留学中、広西師範大学歴史系教授鍾文典、広西社会科学院歴史研究所所長饒任坤両氏の指導の下書かれたものである。また 89 年 1・11 月の調査にあたっては、桂平県博物館長黃培禎氏および紫荆郷の皆さんとの暖かい支持を得た。ここに感謝すると共に、今後の紫荆郷の発展を心から祈りたい。

- 1) 89 年調査記録、および広西区通志館編『太平天国革命在広西調査資料彙編』(広西人民出版社、1962、以下『匯編』), 26 頁。広西師範学院史地系『太平天国起義史調査資料』(油印本、1973、以下『起義資料』), 22 頁。
- 2) 沈修等『殿粵要纂』、卷 3、桂平県図、武靖州図。
- 3) 黄泥冲黄六(84 歳)述。また郷内の地理については広西省文史調査団『太平天国起義調査報告』(三聯書店、1956、以下『報告』), 5 頁参照。
- 4) 民国『桂平県志』、卷 41、紀人、楊蕭諸人伝。
- 5) 大坪温周庭(50 歳)述。
- 6) 無論これは時間と共に変化するもので、太平天国当時の状況とは必ずしも一致しない。一般に多民族雑居区では優勢な民族・言語集団への同化が進み、地域ごとの「棲み分け」へと向かうようで、かつて「来人」が相当数を占めた貴県龍山などでは、逆に漢族のチワン化が進んでいる。ただし紫荆の場合は本文のごとく、早くから客家が優位を占めたようである。
- 7) 羅爾綱・王慶成の問題提起のほか、小島晋治「拜上帝教・拜上帝会と客家の関係——一つの試論」(『中国近代史研究』1、1981)。劉佐泉「拜上帝会と

「金田団營」の前夜（菊池）

客家人』(『雷州師範学院学報』、1987—4 期)。また饒任坤・陳仁華編『太平天国在広西調査報告全編』(広西人民出版社、1989、以下『全編』) も同様の視点を取っている。

- 8) 汪森『粵西叢載』、卷 28、藤峽。民国『桂平県志』、卷 31、紀政、風俗。同書卷 53、紀文、文録八、敦文經「平断藤峽碑」に「(嘉靖十八年、官軍)攻紫荆・大冲……軍營・大黃泥嶺諸巣」とある。また 2) 参照。
- 9) 木山村趙進安・陳××述、および 89 年調査記録。
- 10) 同治『潯州府志』、卷 26、諸蛮、侯大狗伝。文中石門・沙田・古營などは皆紫荆郷内の地名である点に注意。
- 11) (広西区図書館蔵)、卷 4、紫荆山隘口。
- 12) 軍營村藍達森(52 歳)・侯業昌(75 歳)・趙蓮英(67 歳)・李啓成述。「勒竹坑」については、容県石寨『陸氏族譜』(容県博物館蔵) に「帰德土州五屯所勤竹社人、自前明正統天順年間、以狼兵至容、剿捕山寇」「初來潯州府桂平県、前明天順七年來容」とある。軍營村の歴史と 11) の史料に「招狼人守隘口」とある点を考えると、あるいは彼らは狼兵の後裔と思われ、「広東」の部分は後代の追加である可能性が高い。
- 13) 侯業昌述、および花雷・茶地村訪問記録。瀬川昌久「村のかたち」(『民族学研究』、47-1、1982)。また「移住民社会」の概念については山田賢「清代の移住民社会——嘉慶白蓮教反乱の基礎的考察」(『史林』、69-6、1986) の優れた問題提起参照。
- 14) 道光『桂平県志』(広西区図書館蔵)、卷 15、諸蛮、獦人。
- 15) 軍營村藍達森・侯業昌述。
- 16) 茶地村盤信光(57 歳)述。民国『桂平県志』、卷 31 に「近聞宣里新墟、尚有盤姓十数人。然言語・礼儀・居止・嗜好・概与齊民無別」とあるのは彼らのことである。
- 17) 民国『桂平県志』、卷 31、紀政、風俗。また同志は道光志の「三・四十年前、猶有所謂浪場……近年来、每逢放浪之期、惟惡少爛鬼、相与徵逐、於是無有到場矣」の記載を引用、「蓋指宣姜各里獦俗而言……若武平・趙里等處、則光緒初尚有放浪者」と述べ、金田一帯のチワン族の漢化が桂平県内でも早く進んだ事実を裏付ける。こうした問題は細かな分析が必要で、本稿では漢化著しいチワン(チワン化した漢族を含め)について、現地の習慣に倣い「講壯話」の呼称を用いることとする。
- 18) 茶地村盤信光述。また軍營・花雷村訪問記録参照。
- 19) 古程『黃氏族譜』(莫村黃棋熙藏)。黃体正『帶江園詩草』(広西桂林図書館蔵)、卷 6。古程黃氏については西川喜久子「広西社会と農民の存在形態——十九世紀前半における」(『講座中国近現代史』、1、東京大学出版会、1978)。

- 稻田清一「太平天国前夜の『客民』について——広西省桂平県における郷約・保甲制再編成を素材として」(『名古屋大学東洋史研究報告』, 11, 1986)。
- 20) 王謨『劉氏族譜』(王謨村劉文璽藏)に11世万寅「分住宣一里古掃村, 後改遷紫荆山鯉灘村」とあり, 現在6百余人。
- 21) 鵝母氷『黃氏族譜』(鵝母氷村黃宗齡藏)および黃宗齡述。
- 22) 茶地村趙天寿(71歳)述。彼らは「做生意」したと言い、「粵東肩挑貿易之輩, 必求能講壘……則貨物易售」(道光志, 卷15)の一例か。現在は「講白話」に戻っている。
- 23)『帶江園雜著草』(広西桂林図書館藏), 卷5, 勸規五条。
- 24) 軍營村藍達森・茶地村盤信光述。
- 25)『帶江園雜著草』, 卷5。民国『桂平県志』, 卷29, 紀政, 食貨中。
- 26) 羅香林『客家研究導論』(1933, 広東), 中川学・王松興の研究参照。凌晨「客家人, 客家話在桂平」(『桂平文史』, 1984~3期)。『陸川文史資料』, 5, 1989。
- 27)『太平天国文献史料集』(中国社会科学出版社, 1982), 329頁。
- 28) 鍾文典『太平天国人物』(広西人民出版社, 1984), 115頁。
- 29) 大坪山頂『劉氏族譜』(撰修年代不明, 抄本, 大坪劉解彬藏)。
- 30)『王氏族譜』(石人村王万寧藏)。石人村王朝森(74歳)述。王朝森は王大作の曾孫で, 数多くの貴重な証言を残したが, 89年6月死去。解放前の事情に詳しい人々は多くがすでに高齢で, 族譜の収集と共に早急な調査が望まれる。この『遺囑』は墓碑からの転載とみられ, 遅くとも東城の代までに書かれたものであろう。
- 31) 王大作『日新斎稿』(石人村王万寧藏)。
- 32)『武城曾氏族譜』(民国33年修, 合水村曾家寧藏)。
- 33)『廣東客家民族の研究』(外務省情報部, 1932)。
- 34) 賀県石塔『黃氏歴代族譜』(民国庚午年抄本, 広西区図書館黄啓文藏)。この黃氏は乾隆年間に広東惠州から移った客家。引用の詩は有名で, 客家・「講白話」を問わず広く見られる。
- 35) 民国27年『象県志』(広西桂林図書館藏), 第2編人口, 6・人口之移動。
- 36) 光緒『貴県志』, 卷5, 紀人, 風俗。
- 37) 王大作『日新斎稿』, 「紫荆山文」。
- 38)『王氏族譜』, 石人村王朝森, 石狗村王培芳(70歳)述。
- 39) 花雷村雷国升(80歳)述。その祠堂の対聯には「世伝東魯千秋紀……」とある。チワン族の多くが「山東青州府白馬県」等の祖籍伝説を持つ点については民国『広西通志稿』(広西区図書館藏), 卷17, 社会篇, 民族一。
- 40) 花雷村雷国升・陳少華・王玉德, 石人村王朝森, 石狗村王培芳述。

- 41) 石人村王朝森述。
- 42)『武城曾氏族譜』, 「宗聖祖祠曾氏開基族譜世系源流序」, 「曾梅西伝」。
- 43) 民国『桂平県志』, 卷9, 紀地, 墟市。同卷49, 紀文, 文録四, 黃榜書「募修紫荆三江墟路引」, 「重修新墟采村江馬口石路募捐引」。
- 44) 民国『三江県志』, 卷2, 社会, 民族。
- 45) 民国『桂平県志』, 卷37, 紀人, 果行伝。
- 46)『武城曾氏族譜』, 「宗聖祖祠曾氏開基族譜世系源流序」。
- 47)「曾開文墓表」(『報告』, 110頁)。
- 48)『報告』, 109頁。また開俊と楊家の関係については簡又文『金田之遊其他』(上海商務印書館, 1944), 28頁。
- 49) 鍾文典『太平天国人物』, 78頁。『匯編』, 65頁。『起義資料』, 33頁。『報告』, 11頁等。
- 50) 鍾文典「拜上帝会闘争基地的創建」『太平天国史論文集』(広東・広西人民出版社, 1983), 430頁。「王作新墓碑」『太平天国文献史料集』, 355頁。『王氏族譜』。光緒『潯州府志』(広西区図書館藏), 卷49, 列伝, 王作新・徳欽伝。
- 51)「曾開文墓表」。広西師院史地系「太平天国起義幾個問題の調査」『太平天国史論文選』(広西人民出版社, 1981), 290頁の「趙振元在道光十二年捐了監生」。大坪『劉氏族譜』および大坪劉氏祠堂石碑。
- 52) 古程『黃氏族譜』。
- 53)『王氏族譜』。王朝森述。『写去嘉応州信稿』(石人村王万寧藏)。また鰲田『許氏族譜』(牛田村許樹春藏)。
- 54)『太平天国文献史料集』, 341頁。
- 55) 卷49, 列伝, 王作新伝。
- 56)『武城曾氏族譜』, 『王氏族譜』。王朝森述。ハンバーグ『洪秀全の幻想』(青木富太郎訳, 生活社, 1941), 85頁
- 57)『太平天日』(『原典中国近代思想史』, 第1冊, 岩波書店, 1976), 189頁。
- 58)『武城曾氏族譜』, 『曾玉環墓表』。大冲『曾氏族譜』『報告』, 90頁。『起義資料』, 38頁。王慶成「訪問金田, 紫荆」『太平天国の歴史和思想』(中華書局, 1985), 510頁。
- 59) 王慶成編注『天父天兄聖旨』(遼寧人民出版社, 1986), 6頁。
- 60) 小島晋治「PUBLIC RECORD OFFICE OF LONDON 所蔵初期太平天国兵士十名の供述書」(『歴史と文化』, XIV, 東京大学教養学部人文科学紀要, 1982)。
- 61)『起義資料』, 50頁。
- 62) 60)と同じ。
- 63) 黃培祺「關於『建造仏子路碑』的評価」(『學術論壇』, 1981~5)。『全編』,

- 443 頁。
- 64) 黄泥冲黄六述。こうした現象は普遍的に見られ、田寮や山内に小屋を設け住んだ。石人王家の始祖達瑞も、入山後暫くは開墾地を求めて細かな移動を繰り返している。
- 65) 鍾文典『太平天国人物』、77 頁、169 頁。また盧六については客家説・チワン族説がある。
- 66) 民国『桂平県志』、卷 29、紀政、食貨中。
- 67) 60) と同じ
- 68) 116 頁。
- 69) 客家話「倒壇」、台湾では「童乩」。また鈴木満男「台灣漢人社会と tangki の構造的連関」(関西外国語大学国際文化研究所編『シャーマニズムとは何か』、春秋社、1983)。
- 70) 卷 8、紀文、梁慶祥「關邪説」。
- 71) ハンバーグ、前掲書、117 頁。『天父天兄聖旨』、43、44、67 頁。
- 72) 道光『桂平県志』、卷 15、諸蛮、猶人。
- 73) 鍾文典『太平天国人物』、169 頁。『天兄聖旨』は白話表記された客家話。ここで蕭朝貴は「鋼手橋」(腕相撲の意) など客家話特有の単語を多く用いている。
- 74) ハンバーグ、前掲書、86 頁。鍾文典『太平天国人物』、452 頁。茶地村趙天寿・軍營村藍達森・侯業昌述、花雷村調査記録。また倫姓は原籍・移住年代共に不明。
- 75) 茶地村訪問記録、道光『桂平県志』、卷 15、諸蛮、猶人。塚田誠之「明清時代における壯 (Zhuang) 族の佃農化に関する一考察——明清時代壯族史研究」(『東洋学報』、67-1・2、1985)。同「中国廣西のチュアン(壯)・ヤオ(瑤)族と漢族との政治=文化的関係の比較考察」(『国立民族学博物館研究報告』、14-2、1989)。なおチワン族の太平軍参加については『報告』・『匯編』とも当時の政治的要請から誇大報告が多い。李開芳・林鳳祥の籍貫問題はその最たるもので、軍營の藍・陳 2 姓についても、今回は参加例を確認できなかつた(『天兄聖旨』には藍永成・茂前・茂鳳・茂青の名があるが、軍營藍氏にこの字輩はなく、鵬隘山人のようである)。また蜂起の時、花雷雷定春は義兄だった楊秀清を「燒炭佬、擺什勝威風」と罵り、参加しなかつた(『報告』、39 頁)とあるが、ここには定住民であったチワン族地主の、定着に失敗した移住民への違和感がはっきり表明されている。
- 76) 木山村訪問記録、紫荆衛生院趙文金・良段村李××述。
- 77) 民国本、卷 31、紀政、風俗。その移動範囲については同書卷 6、紀地、閔隘、北定閔に「里六村……再入有……青冲……間有猶人山子來此勞山種作、但不常有耳」とあり、このあたりが南限か。
- 78) 民国『桂平県志』、卷 31、紀政、風俗。良段村李××述および鍾文典氏の教示。「熟猺」については乾隆志、卷 4 と『粵西叢載』、卷 24。民国志、卷 9、紀地、墟市、江口。
- 79) 道光『桂平県志』、卷 15、諸蛮、猶人。石人村王朝森・石狗村王培芳・軍營村藍達森・侯業昌述。
- 80) 道光『桂平県志』、卷 15、諸蛮、猶人。合水村曾家寧述。
- 81) 木山村訪問記録、また平南県でも同じ現象が見られる。
- 82) 石人・石狗・合水・木山・茶地村訪問記録、また大坪温家の場合、族人の叱責を恐れ遠く金秀に「上門」した例がある。
- 83) 60) と同じ。
- 84) ハンバーグ、前掲書、86 頁。鍾文典『太平天国人物』、17 頁。
- 85) 『王長・次兄親目耳共証福音書』(中国近代史資料叢刊『太平天国』、神州国光社、1953)、516 頁。
- 86) ハンバーグ、前掲書、89 頁。